

# 創造的あそび論

語る人

遠藤周作

欠乏の中で遊ぶ



—— きょうは「よりよく遊ぶ」ということをテーマにいろいろお聞きしたいと思います。レジャーブームの昨今、遊ぶことに忙しくおいたてられるというのが、風潮のようなんですが、「遊ぶ」というのは本来ワイワイとそうぞうしいものじゃないんじゃないか、とわれわれは考えています。そこで先生の「狐狸庵閑話」のナマケモノ論を拝見して、目を開かれたような気がしたんですが……。

それはですねえ、わたくしが体力でもあり、年令も若ければ、わたくしは元来、好奇心の強いほうですから、みんなと同じようにワイワイさわいでやったかもしれないけれど、それほど体もじょうぶでなかったものだから、それに若い時代もすぎましたし、そこでそういう連中にも、楽しみはあるんだという意味です。もともと、ぼくとかぼくの仲間とかにはグータラが多いですから、何ていうかな、パリパリあそびじゃなくて、グズグズあそびなんだな。

たしかに日本人はあそび方がへただと思いますよ。「あそび」と「疲労」ともなっている感じがすよね、旅行なんか。これはまあ、しょうがないんでしょうけれどね、働きばちみたいな人が多いからさ。たまの休みという全員くり出

す日だから、結局、どこへいっても満員電車、遊園地へいってもつかれて帰るで、せつかくのあそびの日がつかれるための日になっているからねえ。

— そういうことになる、どこへも行かないで、家でゴロゴロしてるのが、かえって最高の遊びじゃないか、ということになりませんか。

ゴロゴロっていつでもねえ、空想力があるのとないのと、好奇心があるのとないのとでちがうんじゃないですか。

好奇心があつて、自分を何かにしたてる気持があればですよ、どういう状況の中にあつても遊べるんじゃないかな。子供が、おもちゃ買ってやらないでも、木ぎれひとつを軍艦にみたてて何時間も遊ぶじゃないですか。あの原理を、楽しみ方を、おとなになつてももちこんでいいんじゃないかな。ところが今の人というのは、舟なら舟をもつてこないとあそべないんだよね。

ぼくら戦争中でしたからね、ものを十分に食うということができなかったでしょう。そうすると友だちが三人ぐらいあつると、みんなで大福を食つておるのだという状況を想像しあいながら、そんな気持になるあそびをやったりしたものです。

— 欠乏の中の方が、あそびは豊かにある……

そうですね。ないと案外いろんなことができるんじゃないですか。あるとね

あきること、あきることがでてくる。あきると緊張感が失われてしまう。遊び方というのは緊張感をいかに維持するかということでしょう。

## 変装のすすめ

— 豊富の中で創造的に遊ぶ考え方はどうですか。

そうだなあ、豊富ならば、豊富でないあそび方というのが一番せいたくじやないんですか。それからもうひとつ、ひとがやっているからテーマもやろうというあそび方があるでしょう。つりブームだからつりへ行く、みんなドライブへいくからドライブへ行きますからねえ。しかし人がやっていないあそびで、いくらでもおもしろい遊びをひねり出せると思うんですよ。そんなに金かけなくてもね。

たとえば、これ一例だけども、変装の道具をばつと買ってきてごらんになったかどうか。ヒゲとサングラスと、それをつけて町を二時間お歩きになってごらんない、全然気分がちがうから。これは空想力のあそびです。自分が別の人間になったあそびですよ。別の人間になりたいという欲望ってのは、この社会生活の中でだれでもあるわけです。二時間なら二時間だけ、戸籍もなければ社会の道徳にも拘束されない別の人間になる——もちろんそれで何か悪いことするつ

てんじゃないですよ——その感じを味わうということですよ。だれも、あまりやらないでしょう。しかし、やってみればとてもおもしろいあそびですよ。

僕は一度、老人に化けて銀座なんか歩いた経験があるから言うけれど、とっても楽しかったね。

— それで知りあいに行ってみるとか。

わからないです、はじめは。でも知りあいに行ってみたりするというのは、こ

## 遠藤周作氏

作家。一九二三年生まれ。慶大卒業後フランスに留学。帰国後「白い人」によって昭和三十年上半期の芥川賞をうける。その後「海と毒薬」（昭和三三）「沈黙」（昭和四一）などの作品で、宗教や罪の問題をとりあげている。

他方「おバカさん」をはじめとするユーモア小説、「狐狸庵閑話」などの随筆も発表、また、テレビや週刊誌でも対談などで活躍されている。

＊

お会いしてみると、思ったよりはるかに偉丈夫である。記者の質問に関西アクセントのある力強い声でトウトウと語られた。（写真は成城大学で）





人の声を出して他人になり切れるか、という遊びですね。だからルールがいりません。

根本的なルールというのはユーモアがなくちゃいけないっていうこと。つまりだまされた相手が笑えるようなものでなくちゃいけない。相手が怒ったり、めいわくがかかったり、被害をこうむるのはそれは悪ふざけです。ところが、いたずらと悪ふざけをみんな混同しちゃうんだよなあ。

——受けとる側の精神的姿勢にもよるでしょう。

だからルールが三つあります。一つはごく親しい相手じゃなくてはいけない。二つは、相手が「こんなところでだまされたんじゃあ、しょうがないな」と思えるものを入れること。たとえば友だちのところへ電話をかけて、「こちらは電報局、電報が来ましたので読みあげます」とやりますね。書いてくださいといってアカギ山のアとかフジサンのつとかいいますが、アンポンタンの「ン」というのはいれなくちゃいけないわけです。本当に電報局ならアンポンタンの「ン」なんてことは決して言わない。それを向こうが書きとれば、これはむこうがしょうがない。相手も「これでひっかかったのだからしょうがなかったな」というところは入れなくちゃいけない。

それから、人の不幸をネタにひっかける——だれが死んだとか。それに子供が誘

拐されたりすると、お母さんに脅迫電話をかけるヤツがいますね。あんなのはいたずらじゃないですよ。

ユーモアも何も無い。これはいけない。この大原則を守れば、楽しくできますよ。

## 遊びのバランス

——あそびというものの人生における価値についてはどういうお考えをおもちですか。たとえば、暗い人生をおおいにくすためのもの、といった考え方もあると思います。

もうひとつあると思いますね。潤滑油ね。現在のような社会関係だと、相手が信頼できないという気持ちになりますよ。自分も、相手も信頼できない。うらぎったり、うらぎられたりということがありますからね。あそびは、ひとつは人間と人間との信頼関係の回復にずいぶん役に立つんじゃないかと思えますね。他人というものに親しみをもちたせ、信頼感を何となくもてるようにできるのは、ぼくはあそびじゃないかと思うんです。積極的な意味をもたせたいと思いますね。

——もう少し一般化して、あそびが仕事か、ということはどうですか。あそぶことが人生の生きがいだという、あそび至上主義があらわれてきていますけど。

それはね、人間というものを知らない

たとえ大小の量の違いがあっても片方の車輪がなくなれば自転車ではなくなるように遊びと仕事もそのバランスが大切です



んじやないかなあ。あそびというものは、必ず、ある時間すぎると空虚になるものです。下世話で「よく働き、よく遊べ」というやつですよ。あのリズムがなかったら、あそびというのは絶対あきますよ。どんな大きな快楽があってもあきますよ。たとえば、東京ではあそびし

——働くことと遊ぶことが混然一体になっている職業もあるんじゃないですか。芸術家、たとえば画家とか。

かた、というのは、多くて三十種類ぐらいいしかなんじやないですか。映画みてお茶のむとか、ハイキングに行くとか。ある程度なれてくると、あとはもう退屈とマンネリになりますからね。それをう

あれは遊びじゃないでしょう。小説家でもそうですが、遊びじゃないですよ。じょうだんじやないよ。だってぼくら純文学の小説三十枚書いて、一カ月三キロから四キロぐらいいやせますもの。ただ、こういうことはあります。ぼくは、小説書くあい間にテレビにでます。

これはまったくのレクリエーションです。ぼくはマージャンもやらない。徹夜マージャンになると健康上よくありませんからね。酒もそう飲むわけではないから、気分転換というか、バランスとる意味で、あれはぼくは好きで出ているんです。レクリエーションです。それでまあ、お金ももらったりする。そういう意味で遊びと仕事が一体になっているという。しかし、本職とちがってぼくは無責任にやっている。これがプロだったら、なにせジャーナリズムってのはおたがいにしるぎをけずる世界ですから、表面は笑ったりふざけたりしても、いろいろ計算しているんですよ。使いのものにならないからやすてられますからね。あれは苦し

いでしよう。ぼくなんか、テレビに出ても、それが本職じゃないから、もう使いませんと言われりゃ、ああそうですか、それでけっこうですといえます。その点がちがいますね。プロになつたたいへんですよ。

## 遊びと文化

「あそび」という概念が少しちがうと思いますが、たとえばホイジンガという人は「ホモ・ルーデンス」ということを言っていて、あそびの中に文化が生まれた、といっていますね。そういうかたちで遊びというものをとらえたらどうですか。



そういうことを言えば、いろんな考え方がありますね。フロイド的にいえば、文化というものは、人間のリビドが高められたものだということになるし、別の学者からいえば、宗教的なものが俗事となったのが文化だといういい方がありますからね。それは、何ともいえないんじゃないかな。しかし、初期の段階ではたしかに遊びだったと思います。働くということが動物を追ってたおしたりしなければならなかったころは、ほらあなの中に絵を書いたりするの、働くということと以外の人間の行為だったろうと思いますが、これがあつた時代を経ると、職業化してもうあそびじゃなくなるでしょう。ある段階においてだけいえることだと思っていますね。少くともいまの時代にはいえないんじゃない。菓子屋の職人は菓子をもう食べたくなというのと同じ原理ですよ。あそびは「快感」がなければ成立しないわけでしょう。絵を描いている人間にとっては快感はないですよ。創作上の喜びというのは完成したときには生まれるかもしれないが、創作の間というのはつらいですよ。

先生の小説を拝見すると、たいへん陰気なものと陽気なものとありますねえ。あれも片方は一種の「あそび」じゃないんですか。

そうですねえ。まあ、こんなことをいっちゃ悪いけれども、陰気な方がほんとしてですよ。別の方で精神のバランスをと

っていることはたしかですね。

北杜夫さんの小説もそうですね。昔の小説家はそういう意味で一色だったけれど、このごろの小説家は二色になってきた。

つまりさ、人間陰気なだけでいられるほど単純じゃないだろうという気持がこっちの方にあるわけですよ。第一、みんなもう少しイナカッペでなくなりましてからねえ、全世界の苦悩を一身に背おっているような顔を昔の小説家はしていたけど、ああいうのは偽善者だって感じがだんだんしてくるじゃありませんか。

## 人間くさい趣味

先生何かご趣味は？

つりとかなんとかいうものはないんですよ。人間くさいものだったら、何でものぞいてみるというのが趣味といえば趣味だなあ。つまり「火事場見物」というのがあってしょう。となりのうちで夫婦げんかしてたらどこにかかくれてのぞいてみるというあれですよ。あれをもっと大きく広げたようなものです。

それは小説をお書きになるのとは関係ないんですか。

ないです。たとえばぼくは城あと見物が好きです。ぼくは時代作家でも何でもありませんけれど、やっぱり人間のおいがす



るからですよ。それも大きな平城じゃなくて、昔式の山城ですよ。そこへいつて二十分でも三十分でもしゃがんでいて何ともいえない気分になりますね。

—— おどりや歌の方はどうですか。

ぼくはああいうのはだめなんです。

小唄でもならったりしたいなあと思ったりすることはあるんですがね、何かひとが習ったりやったりしているものは競争になったり、またマンネリになったりするからやらない。ゴルフもぼくはやりませんですよ。

—— 自分でこしらえちゃうんです。

その方がおもしろいじゃないですか。

自分の性格、気質、氣もちにあったあそびがひねり出せるからです。

—— レクリエーションというのは「創造」のクリエーションがはいつてますからね。

「レ」だからね。再び、さらに作り出すんだからね。

## 「木座」活躍す

それからぼくは自分で芝居やったりするのが好きですね。これははじめ申しあげたように、変装する楽しみです。これこそ本当のあそびですわなあ。

—— 先生の劇団は「木座」というんですかね。どういう仲間のかたですか。

いや、そのへんの主婦、サラリーマン、学生ですよ。昔の村しばいと同じで

すよ。いま、村しばいというのが都会ではないから、おれたちでやろうとよびかけたら、ぼくの知らん人が、意外とじやかじやか来まして四十何人です。

—— 公演は？

去年はロメオとジュリエットをやりましたら、超満員で、一万五千円の収入があったくらいです。

私の役はマーキュリーですけれど、うちはクジビキですからねえ。座長も何もないので、役のふりわけはアミダくじで、ロメオは四人、ジュリエットも四人えらんで、みんなが主役になれるようにしたわけです。

うちの条件はこうなんです。職業にしない、ということ。職業にする人はやめてもらう。職業にしている人はいれない。それは結局ライバル意識がでてきたりして、楽しみがなくなるからです。

—— それを一般化すると、どんな職業の人でも、全然それと関係のない遊びの世界をもっていたいものだ、ということになりますね。

そうねえ、職業というか、それによって世に立っていかなくちゃならないとか、修業していかなくちゃならないとか、あるいは利益を占めなくちゃいけないというものでない、純粹レクリエーションを、わたくしの劇団「木座」みたいなかたちでもっていなくちゃならないんじゃないでしょうか。そうでないと、楽しめないでしょう。

—— 木座はどのくらい練習しますか。

四日間。まあ、衣裳は、わたくしの関係のある劇団でタダで貸してくれるんですよ。それに演出もその人が来てくれるんだけど、頭かかえてね、まあ、あきらめてるなあ。

—— これからもお続けになるんですか。

ええ、女の子もはいつてるんですけど、お嫁にいつても亭主といっしょに出る、というふうになってほしいですね。

まあ、こうして芝居をやっている何日間かは、人間関係がたいへんいい。うらぎられるとか、ぬかれるとかいうことがないんです。ぼくはそういうのが、本当のあそびだと思えますよ。

## 余裕がほしい

—— 演劇にしてもコーラスのサークルを作ろうとしても、そういうところへ参加しようという人は一部の人で、大多数の人は出不精とか、なかなか、そういうところへ出てこようとしません。

それは出不精なんだというより、いまの東京の生活、日本の生活では、とり近所の友だちがだんだん少なくなってきたというんじゃないでしょうか。でもね、ぼくは草野球のチーム作ろうと思つて近所で募集したら意外に來ま

したよ。いろいろな事情があつて実現しなかったんですが。有馬頼義がやっているんですよ。彼は本格的ですね。

それからね、外国人をみてみると、日曜の午後なんか実によく散歩します。二時ごろ昼食とつて夕方まで、家族づれでね。ぼくなんかどがおもしろいんだらうと思つたけど。日本人の性格からいうと、散歩するなんてのはわからないような気がしたけれど。もつとも、いまや東京には散歩するような風景がないんだよな。外国ではたしかに「歩ける」んだ。

歩いていい風景とか、ふつと休むにつごうのいい公園とかがあつたりしてね。そういうふうな都会というものをこしらえてるわね。東京の場合、車は多いし歩くところかきれるねえ。

—— 日本人は歩くのが弱いんじゃないですか。

どうかなあ。ぼくなんかほとんど歩かなくなつちやうたけれど。うちの近所の人で、日曜というときと家族で遊びにいくつて、野山を歩くのをただひとつの楽しみにしている人がいますよ。まあ、うちは郊外だからね。

—— 外国人のあそびということで、お気づきのことはありますか。

外国人はせかせかせかしていないわね。たとえば夕ぐれに、カフェのテラスで、一時間も二時間も一ぱいのぶどう酒をおいて、それを飲みながらすわっている。ところが、日本人の遊びというと、飲み

いっても、四十分もいると、それ次のバーへってね。酔わずんば止まず、という感じだね。あれは、おれたちの長い間の貧乏生活から来ていると思うんだ。つまり楽しみがなかったから、お祭りみたいなときに爆発的にさわがなければならなかったという、気持の余裕のなさだな。だから町内会だの職場だので熱海なんかへ行くと、となり近所のめいわくも考えず、さわぎまわるだろ。やっぱり、一年に一、二度しか、あそぶという機会がなかったからそういうことになったんで、これからだんだんに生活がよくなってくると、ゆったり遊ぶというようになってくるんじゃないでしょうか。何も金を使わなくても、一ぱいのぶどう酒で夕暮のけしきを見ながら……ということもできるわけでしょう。

昔ありましたね。縁台にこしかけて、将棋なんかさして、雑談するといったああいうようなカタのあそびが、われわれの時代になくなって来たでしょう。もう一度、ああいう遊びを楽しむ気持になれんかなあ。テンポの早い時代になって、むずかしいでしょうけれどね。

昔の方があってそういう「遊び」のところがあつた……。

それはものがなかったからですよ。ものがあるときにそれができればなおいいね、人間として。

もう一度 こういう遊びを楽しむ  
気持になれんかなあ……

## これからのレジャー



うでしょう。

—— みんなが買うんで経済が繁栄するという  
こともあるんでしょう。

たしかにあるんだけどさ、ともかくレジャーに金を使うのが好きな国民です  
ね。

—— それも夜行日帰り型のおでがるなレジャー  
が多いようですね。

やっぱり月給が少ないから、なかなか  
長くはいけないでしょうし、かといって

みんなが行っているんだから行かなきゃ  
ならんという気持もあるでしょうし、悪  
循環じゃないかな。

—— そういうとき、もう少し余裕をもてとい  
うのも無理な話で、むしろ、にぎやかに  
ワイワイやっているうちにだんだんよく  
なってくる……。

だろうと思いますよ。だから当分この  
まま続けていいと思うね。そしたら、だ  
んだん遊び方もよくなってくる。

だってここ四、五年ぐらいで、男の服  
装がずいぶんよくなってきたでしょう。  
若い人たちは本当におしゃれになってき  
ましたね。それと同じで、今まで、遊び  
かたがドロくさいけれど、もう少ししたて  
ば、若い連中の遊びもスマートになって  
くるんじゃないですか。そういうのがお  
となになって、子供ができたりますと、  
もつとよくなっていくんじゃないです  
か。

もうひとつ、外国では、遊ぶときは家  
族ぐるみで遊びますわね。だれもご存じ  
でしょうけど。われわれは男同士、女  
同士、娘同士、子供同士であそぶね。

—— 同種類が集まってあそぶばかりで、ちが  
うのときあいすべを知らないというこ  
とですか。

どうなのかなあ。テレくさいのかな  
あ。女房とあそんだりするのは楽しくな  
いからねえ。あなたなんかもうじゃあ  
りませんか。女房とあそぶより、ほかの  
女の子とあそぶ方が楽しくありません



か。これはやっぱりセカセカ根性のあらわれでしょう。われわれの場合、あそびというのと刺激というのとイメージが重なっているから、そのせいもあるんじゃないかな。しかも刺激のかたちというのが、まだ西洋人みたいないろんなバリエーションがないんだ。酒を飲むとか踊るとか快楽にふけるとかそういうものがあるって。さっきも言ったように東京ではあそびの種類は二十か三十しかないと思えます。ぼくは相当あそんでいるんですよ。だからかなり実感をもっているんです。しかしもうそういうあそびをくり返すのはあきました。ぼくは女道楽はしたことないけれど、友人の吉行淳之介が言っていますよ、バーも何ももうあきたって。行かないですよ、最近。

しかしまだ、金を使わないで遊ぶことが無限にありますよ。まだ、考えられていないことが。それはひとりひとりが考えていっていいんじゃないかしら。

## レクは説教にあらず

——この雑誌も、お金がかからなくてしかも新しいあそびを開拓しようという信念をもっているわけです。

そう、ただ、それをおたくの方で教えるというのではなくて、ひとりひとりがケースバイケースで、自分で考えるとい

うことが望ましいんじゃないでしょうか。

——自分で考えるためのきっかけを与えるところまでですかね。

しかしまあ、このレクリエーションというのが、まさにエッセイみたいになるというのがまったく日本的ですなあ。レクリエーションの理論をつけなくちゃならないというのが非常に日本的な感じするなあ。

——レクリエーションというのは、意識にのぼってこなくていいことだということですか。

ええ。ある人にとっては、友あり遠方より来る、また楽しからずや、がレクリエーションでしょう。ある人にとっては金魚飼うのがレクリエーションでいいじゃないですか。

——これこれこういうものがレクリエーションであるなんていうのは、後進国である証拠かもしれませんね。遊ぶことを説教されなければしなかった。

貧しかったんですねえ、われわれは。

レクリエーションするのが罪悪感をもっていた。ぼくなんかもそうですよ。ぼくは小説家ですから時間を自由にすることができ。そこでみなさんが働いている午前中に映画みたりすることもある。終って一歩外へ出ると、もうみなさんセカセカと丸の内なんか歩いている。すごく罪悪感にとらえられますね。

——先生の年代のかたは、やっぱりそういう

「働き主義」の中で生きて来られたから。

そう、あなたたちの世代の人はちがって来ているかもしれませんね。

## 遠藤周作氏の出題

——結局、あそびのじょうずな人というのは、いろんなことができる人ということですね。

どんなちっちゃなことでも遊べるとい

うことね。そこでね、ぼくは「レクリエーション」の読者の人たちに問題をしますがね、日曜日、午前十時から夕方五時までの間、百円のお金しかなかったとしたら、どうやって一日を楽しみますか。ひとつ考えてみてください。ただしね、恋人といっしょならお金なんかなくても楽しいだろうから、これはやめた。恋人はだめです。

